

千葉県八千代市

公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ

向山遺跡c地点
向山遺跡f地点
ヲイノ作遺跡b地点
小板橋遺跡e地点
阿蘇中学校東側遺跡c地点

平成26年度

八千代市教育委員会

凡 例

1. 本書は、八千代市教育委員会が平成13年度、19年度、22年度及び23年度に、市の公共事業に先行して実施した埋蔵文化財発掘調査事業の報告書である。本整理及び報告書作成作業は、平成26年度事業として行った。
2. 本書に収録した発掘調査は、以下のとおりである。

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因	調査担当
1	向山遺跡 c 地点	大和田新田字向山 507-80 ほか	平成13年11月13日～ 平成13年12月4日	上層 81㎡、 下層 20㎡ /630㎡	歩道建設	森 竜哉
2	向山遺跡 f 地点	大和田新田字向山 500-10 ほか	平成19年5月10日～ 平成19年5月24日	上層 101㎡、 下層 11㎡ /486㎡	歩道建設	森 竜哉
3	サイノ作遺跡 b 地点	緑が丘五丁目 901 番 18・19	平成22年10月5日～ 平成22年10月8日	上層 24㎡、 下層 6㎡ /221.1㎡	歩道建設	常松成人
4	小板橋遺跡 e 地点	大和田字古屋敷 359 番 21・22	平成24年3月19日～ 平成24年3月26日	上層 30㎡ /333㎡	道路用地管理	常松成人
5	阿蘇中学校東側遺跡 c 地点	米本字山谷 2713-5, 2714-1, 2715-3	平成23年10月12日～ 平成23年10月28日	上層 502㎡、 下層 80㎡ /4981.25㎡	消防署建設	宮澤久史

3. 出土遺物で用いた砂・礫の表記と大きさの関係については、土壌学及び国際法の基準に従い、以下のとおりである（単位：mm，礫の大きさは長径）。
巨礫 300～200，大礫 200～100，中礫 100～50，小礫 50～10，細礫 10～2，粗砂 2～0.2，細砂 0.2～0.02
4. 出土した遺物のほか、写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。
5. 本書の執筆・図版作成は、常松成人・山下千代子が行い、遺物写真撮影・編集は常松が担当した。

目次

凡例

目次 挿図目次 表目次 写真図版目次

I 調査に至る経緯	1
II 各調査の概要	
1. 向山遺跡c地点	4
2. 向山遺跡f地点	14
3. ライノ作遺跡b地点	16
4. 小板橋遺跡e地点	19
5. 阿蘇中学校東側遺跡c地点	23
報告書抄録	31

挿図目次

第1図 本書掲載調査遺跡位置図	2	第10図 ライノ作遺跡b地点位置図	16
第2図 向山遺跡c地点・f地点位置図	4	第11図 ライノ作遺跡b地点トレンチ実測図	17
第3図 向山遺跡c地点平面図	6	第12図 小板橋遺跡e地点位置図	19
第4図 1T実測図	6	第13図 小板橋遺跡e地点トレンチ実測図	20
第5図 下層調査トレンチ土層断面図	6	第14図 阿蘇中学校東側遺跡c地点位置図	23
第6図 OIP実測図	6	第15図 阿蘇中学校東側遺跡c地点トレンチ実測図	24
第7図 出土遺物(1)	8	第16図 OIP実測図	25
第8図 出土遺物(2)	9	第17図 イモ穴参考図	26
第9図 向山遺跡f地点トレンチ実測図	14	第18図 出土遺物	27

表目次

第1表 向山遺跡各調査地点の概要	5	第5表 阿蘇中学校東側遺跡c地点遺構・各トレンチ出土遺物数	26
第2表 向山遺跡c地点出土遺物分類表	7	第6表 阿蘇中学校東側遺跡c地点遺物観察表	27
第3表 向山遺跡c地点遺物観察表	10		
第4表 小板橋遺跡各調査地点の概要	20		

写真図版目次

図版1 向山遺跡c地点(1)	12	図版5 小板橋遺跡e地点	22
図版2 向山遺跡c地点(2)	13	図版6 阿蘇中学校東側遺跡c地点(1)	28
図版3 向山遺跡f地点	15	図版7 阿蘇中学校東側遺跡c地点(2)	29
図版4 ライノ作遺跡b地点	18		

I 調査に至る経緯

八千代市は、首都 30km 圏のベッドタウンとして京成本線沿線を中心に開発が進み、平成 8 年 4 月の東葉高速鉄道の開業以後は、その沿線を中心としたまちづくりが進んでいる。こうした状況の中、市内外の諸条件の変化に対応したまちづくりの指針として、八千代市は第 3 次総合計画を策定し、市政の展開を図ってきた。さらに、平成 23 年度には、「快適な生活環境とやすらぎに満ちた都市八千代」を実現するために、第 4 次総合計画を策定し、「市民の誰もが、八千代市に住んでいてよかったと実感できるまち」をめざして、諸事業を実施しているところである。それら市の事業で土木工事を伴う場合について、八千代市教育委員会（以下「市教委」という。）では、毎年予算策定期間に市役所各課の次年度の公共事業計画を照会することによって把握し、その結果に応じて予算措置をしている。

発掘調査に至る事前手続きとしては、千葉県教育委員会の指導のもと、「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（以下「協議依頼」という。）の提出を求め、回答したうえで、埋蔵文化財包蔵地内の場合、さらに文化財保護法第 94 条第 1 項の通知（以下「土木工場の通知」という。）の提出を求め、「公共事業埋蔵文化財調査事業」として発掘調査を実施している。

以下は、本報告書に掲載した各調査に至る経緯である。平成 13 年度・19 年度・22 年度・23 年度に実施した東葉高速鉄道に平行する歩道建設に伴う調査 3 件、都市計画道路用地の管理に伴う調査 1 件、東消防署建設に伴う調査 1 件である。なお、平成 18 年度以前は、現在の協議依頼に当たる文書は、照会制度の改正以前であるため、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」（以下「照会文書」という。）であり、同様に文化財保護法第 94 条の通知は、同法改正以前であるため、同法第 57 条の 3 第 1 項の通知であった。

向山遺跡 c 地点

平成 13 年 10 月、八千代市長（八千代市都市部都市計画課）から、大和田新田字向山 507-80・81、510-3・5 の東葉高速鉄道に平行する土地 630㎡について、歩道（歩行者専用道路）建設のための照会文書が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、隣接地や周辺の発掘調査で旧石器、縄文土器等の遺物や遺構を検出している。このため照会地全域について包蔵地の範囲内である旨を回答した。同月に八千代市長から土木工場の通知が提出された。市教委は準備が整った同年 11 月 13 日に調査を開始した。

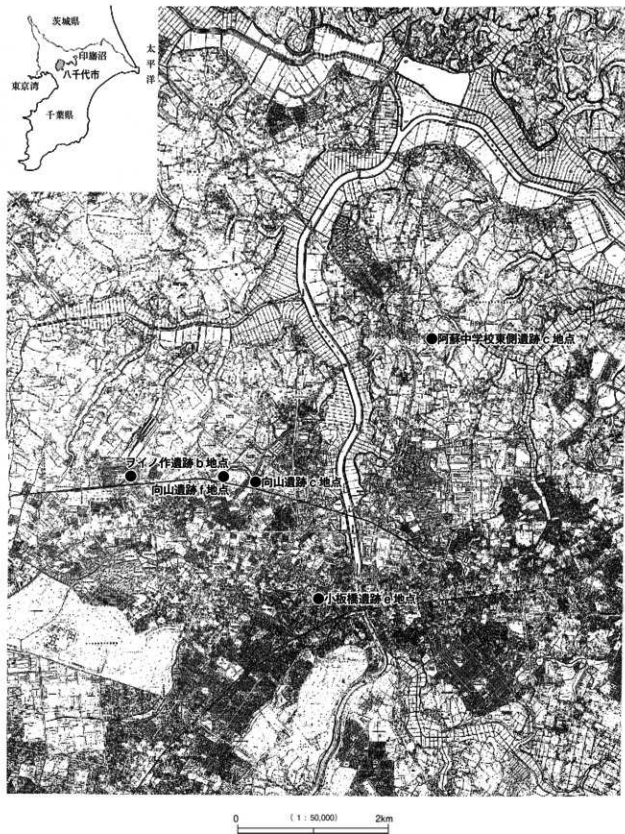
向山遺跡 f 地点

平成 19 年 4 月、八千代市長（八千代市都市整備部都市計画課）から、大和田新田字向山 500-10、501-8・10 の東葉高速鉄道に平行する土地 486㎡について、歩道（自転車歩行者道路）建設のための協議文書が提出された。協議地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、隣接地の発掘調査で旧石器時代石器等の遺物を検出している。このため協議地全域について包蔵地の範囲内である旨を回答した。同年 5 月に八千代市長から土木工場の通知が提出された。市教委は準備が整った同年 5 月 10 日に調査を開始した。

ライノ作遺跡 b 地点

平成 22 年 5 月、八千代市長（八千代市都市整備部都市計画課）から緑が丘五丁目 901 番 18・19 の東葉高速鉄道に平行する土地 221.1㎡について、歩道（自転車歩行者道路）建設のための協議文書が提出された。協議地の現況は墓地であるが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、隣接地の発掘調査で旧石器、縄文時代石器等の遺物や遺構を検出している。このため協議地全域について包蔵地の範囲内である旨を回答し、そ

1 調査に至る経緯



第1図 本書掲載調査遺跡位置図
(八千代都市計画基本図に加筆)

の取扱いについて協議を行った。協議の結果、墓石等の撤去及び市への移管後に確認調査を実施することとした。同年9月に八千代市長から土木工事の通知が提出され、市教委は準備が整った同年10月5日に調査を開始した。

小坂橋遺跡 e 地点

平成22年5月、八千代市長（八千代市都市整備部都市計画課）から大和田宇古屋敷359番21・22の都市計画道路用地約360㎡について、道路管理工事（掘削整地）のための協議文書が提出された。協議地は周辺の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であり、周辺の発掘調査で古墳時代、中・近世の遺物や遺構を検出している。このため協議地全域について包蔵地の範囲内である旨を回答し、その取扱いについて協議を行った。協議の結果、確認調査を実施することとなり、平成23年2月に掘削範囲を再測定し面積を333㎡と改めて、八千代市長から土木工事の通知が提出された。市教委は準備が整った同年3月19日に調査を開始した。

阿蘇中学校東側遺跡 c 地点

平成22年9月、八千代市消防本部消防長から米本字山谷2713-5、2714-1、2715-3の畑地4,981.25㎡について、八千代市東消防署建設のための協議文書が提出された。協議地は、阿蘇中学校東側遺跡と赤作遺跡との間に当たるが、近隣や周辺で中近世の遺物や遺構を検出しており、現地踏査の結果、土師器細片の散布を確認した。このため協議地全域について埋蔵文化財包蔵地の範囲内である旨を回答し、その取扱いについて協議を行った。その結果、次年度に確認調査を実施することとなった。平成23年7月に八千代市消防長から土木工事の通知が提出され、市教委は準備が整った同年10月12日に調査を開始した。

八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書シリーズ

八千代市教育委員会（2003年）『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書』（沼上遺跡、妙見前遺跡、川崎山遺跡）地点、新久遺跡、麦丸遺跡 c 地点、子の神台遺跡 a 地点・b 地点

八千代市教育委員会（2007年）『千葉県八千代市権現後遺跡—公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ—』

八千代市教育委員会（2009年）『千葉県八千代市おおびた遺跡 b 地点—公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ—』

八千代市教育委員会（2009年）『千葉県八千代市殿内遺跡 b 地点—公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ—』

八千代市教育委員会（2013年）『千葉県八千代市平沢遺跡 a 地点・殿台遺跡 a 地点—都市計画道路3・4・9号線建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書—』（公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ）

八千代市教育委員会（2014年）『千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅵ』（麦丸遺跡 e 地点、サゴテ遺跡 a 地点、北海道遺跡 a 地点、保品南遺跡 a 地点、鶴作台遺跡 b 地点）

Ⅱ 各調査の概要

1. 向山遺跡 c 地点

遺跡の立地と概要

向山遺跡は、市域の中央部やや南西寄りに所在し、新川低地から南西に入る須久茂谷津の奥部に臨む台地上に立地する。標高は概ね 24 m 以下である。萱田地区遺跡群の西方に位置する。

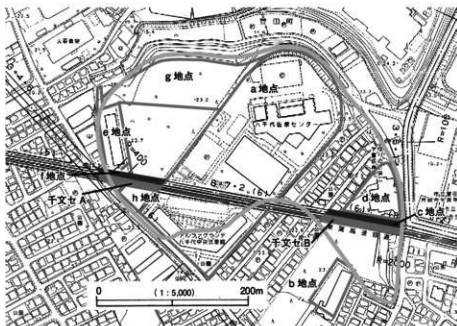
本遺跡は、昭和 56 年 (1981 年) のマンション建設に先行する調査で認識され、昭和 58 年 (1983 年) の『八千代の遺跡』に遺跡 No. 173 として記載された。これまでに c 地点・f 地点を含めて 10 地点で発掘調査が実施されている。東葉高速鉄道建設に伴う財団法人千葉県文化財センター（以下、本項においては「千文セ」という。）の調査区 2 箇所を含む。その結果の概要については、第 1 表を参照されたい。本遺跡は、旧石器時代、縄文時代（前期～中期）を中心とする遺跡と捉えることができる。それら以外の要素としては、d 地点で須恵器環口縁 1 点が出土したのみである。

c 地点は、遺跡の東端部の標高 20 m 前後の台地上縁辺部である。

調査の方法と経過

調査対象区域は、第 3 図に示したように、一部は既に千文セ調査区 B の拡張によって調査されていることがわかり、その部分を除いてトレンチ 1 T を設定した。幅 2 m、長さ約 40 m で、一部拡張し、81 ㎡分の上層調査を行った。下層調査は、千文セの調査区 B の結果を参考として、やや東寄りを中心に 2 m × 2 m のトレンチを 5 箇所（プレトレンチ、01PRET～05PRET と表記）20 ㎡分設定した。人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成 13 年 11 月 13 日から 12 月 4 日で、11 月 13 日機材搬入、トレンチ設定、重機による掘削、トレンチ内精査。14 日～20 日縄文時代遺物包含層調査。16 日トレンチ土層調査、実測記録。16 日・19 日 01P 遺構調査。20 日～30 日下層調査。20 日トレンチ設定、掘り下げ。28 日 01PRET・05PRET の土層調査、実測記録。30 日 03PRET・04PRET の土層調査・実測記録、重機による埋め戻し、現場調査は終了。12 月 3 日・4 日出土遺物の水洗・注記を行い、調査を終了した。



第 2 図 向山遺跡 c 地点・f 地点位置図

第1表 向山遺跡各調査地点の概要

地点名	調査面積 (m ²)	遺構	遺物
a	12000	土坑、焼土跡	旧石器、縄文土器(前期・中期)
b	上層332.8 下層9.6 /2,983.06	土坑1基	縄文土器(中期)1点
c	上層81 下層20 /630	縄文時代土坑2基	剥片、石鏃、縄文土器(前期・中期)、焼成粘土塊
d	380/3,958	なし	縄文土器(前期)、須恵器
e	上層285 下層21 /2,997.73	なし	なし
f	上層101 下層11 /486	なし	なし
g	792/10,813.85	なし	石鏃、剥片、焼礫
h	80/820.86	縄文時代土坑1基	なし
千文セA	755	なし	旧石器、剥片、礫片
千文セB	1,312	土坑1基	旧石器、剥片、縄文土器(前期・中期)、土器片鏃

調査の概要

土層の観察所見としては、1 T南壁で全体の土層を確認した。I層は盛土及び攪乱で、厚さ0.27～0.65 mで平均0.4 m前後であった。以下、II b層(新期富士テフラ層)が厚さ0.1 m前後で断続的に検出され、II c層(暗褐色土、ローム漸移層)は厚さ0.2 m前後で安定しており、最下層にIII層(ソフトローム)を確認した。地表面の標高は、台地縁辺に当たる東側が高く、19.9～20.17 mで、西側に向かって低くなり、西端は18.6 mとなる。ここには北の須久茂谷津から入る小谷があり、それを反映しているらしい。地表面からIII層までの深さは、0.42～0.70 mで平均0.5 m前後であった。III層上面の標高も、東側が高く19.5 m前後、西端は18.1 mと低くなる。

下層調査のトレンチのうち、05PRETのIII層以下の土層を図示した。地表下2.7 m、標高17.3 mまで掘り下げた。IV～V層(ハードローム、第1黒色帯)、VI層(A T包含層)、VII層(第2黒色帯上部)、IX a層(第2黒色帯下部の上半)、IX b層(第2黒色帯下部の間層)、IX c層(第2黒色帯下部の下半)、X層とした。標高18.3 m前後に層厚0.1～0.15 mの暗色の層があり、第2黒色帯下部の一部と考えられた。これをIX a層と判断し、標準層位に当てはめたものである。

遺構について

検出遺構は、トレンチ中央やや西寄りで土坑を検出し、調査した。01 P土坑としたが、土坑2基が交わっているものと判断した。浅い土坑(B)を、より深い土坑(A)が切っている。Aはほぼ円形で、上面は0.92 m×0.89 m、底面はやや楕円形に近く0.73 m×0.64 m、深さは0.25～0.36 mで底面に凹凸がある。覆土は、6層に分層された。Bは、Aと攪乱によってほとんど壊されており、残存部の上面は0.79 m×0.42 m、底面は0.59 m×0.31 m、深さは0.1～0.16 mである。出土遺物は、前期黒浜式と考えられる繊維土器の小片1点である。

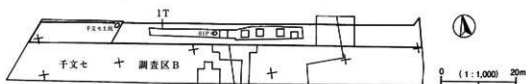
遺物について

遺物は総数352点出土した(第2表)。内訳は、縄文土器268点、焼成粘土塊72点、石器(鏃)1点、剥片9点、小礫1点、焼礫片1点である。全体の76.1%に当たる268点は縄文土器、20.5%に当たる72点は焼成粘土塊である。縄文土器268点のうち、約46.3%に当たる124点は前期後半(浮島式)～末に、28.7%に当たる77点は中期(阿玉台II b式等)に、25%に当たる67点は前期中葉(黒浜式)に属すると判断した。

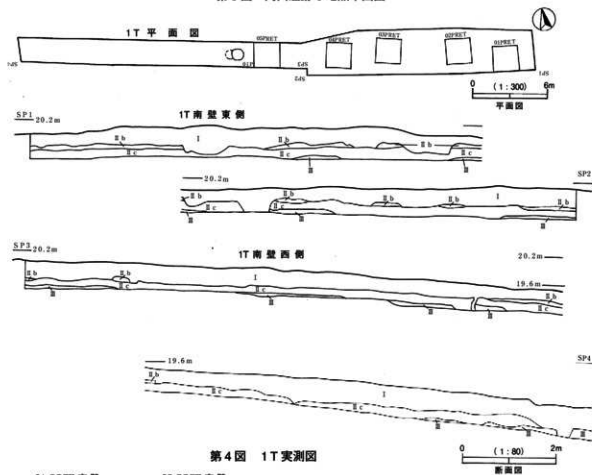
旧石器時代の遺物については、下層調査トレンチから剥片が1点のみ出土したが、1 T出土遺物の中に剥片があり、6点を旧石器時代のものと判断した。

遺物の出土状況は、1 Tの東半に分布の中心があり、東端から18 mの範囲にほとんどの遺物が入る。特に東端から4 mの範囲は、遺物密度が高い。

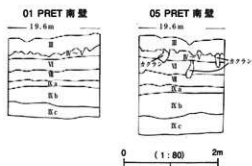
II 各調査の概要



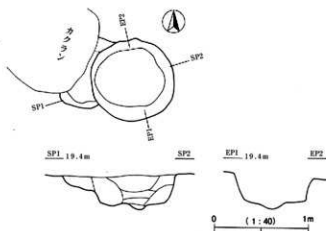
第3図 向山遺跡c地点平面図



第4図 1T 実測図



第5図 下層調査トレンチ土層断面



第6図 01P 実測図

第2表 向山遺跡 c 地点出土遺物分類表

遺物種類		トレンチ					遺構	計
		1 T		01PRET	03PRET	04PRET	01P	
		No付	一括	一括	一括	一括	No付	
縄文土器	前期中葉	55	10	0	1	0	1	67
縄文土器	前期後半	79	24	0	0	1	0	104
縄文土器	前期末	17	0	0	0	3	0	20
縄文土器	中期	63	12	0	0	2	0	77
土器類小計		214	46	0	1	6	1	268
焼成粘土塊		54	8	0	10	0	0	72
石器	石鏃	1	0	0	0	0	0	1
石器	剥片	8	0	1	0	0	0	9
礫	小礫	1	0	0	0	0	0	1
礫	礫片	1	0	0	0	0	0	1
計		279	54	1	11	6	1	352

焼成粘土塊について

遺物の中で特徴的なのは、72点出土した焼成粘土塊である。大きさは、最大のものが第8図42である。焼成は、いずれも不良で脆く、崩れやすい。淡褐色を基調とし、褐色等が混じる。粘土の混入物は、黒色の粒子や赤褐色粒子が見える。縄文土器と混在して出土しており、所属時期は、縄文土器と同じく縄文時代前期～中期の範囲内と見てよいと思われる。縄文土器のうち、最多の出土量は前期後半～末葉であるので、該期に属する可能性は高いが、出土状況でそれを明らかにすることはできなかった。

焼成不良の粘土にどのような用途を想定できるであろうか。焼成不良であるから、よく言われる土器等のテストピースとして焼いてみたということは想定しにくい。あるいは、他の焼成品の副産物として生じたものであったり、保管されていた粘土が火事等で偶然焼けてしまったということなのであろうか。

いずれにせよ、縄文時代人が意図的に入手した粘土と考えてよいであろう。粘土の用途は、第一に土器・土製品の材料が考えられることは言うまでもない。他に以下のような事例がある。

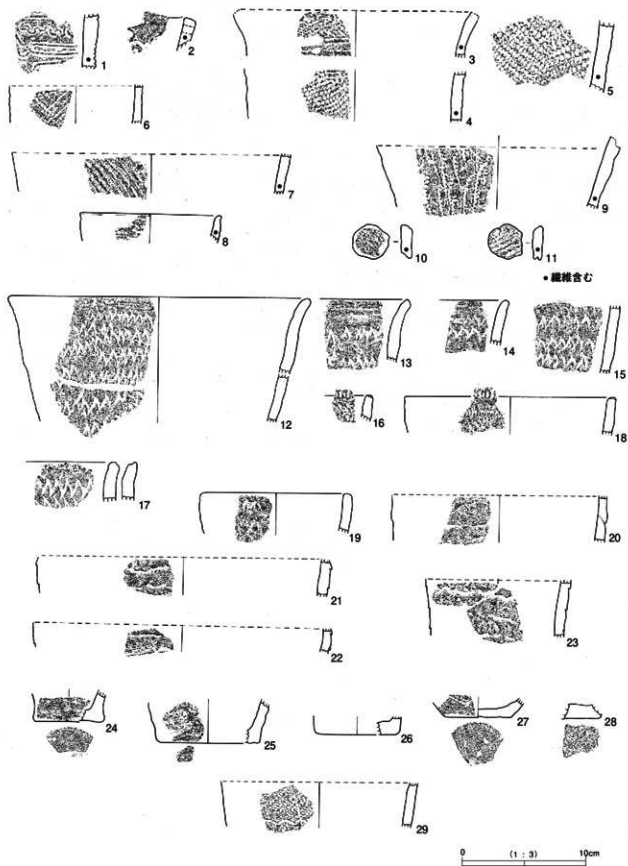
①埋葬に関わった事例として、人骨が褐色粘土で覆われていたという茨城県稲敷市広畑貝塚の事例（小林克ほか2001年）。

②民俗事例で洗髪用に使ったという話があり、「髪は半月から一ヶ月くらいの間隔で洗い、洗ひ粉や、家の裏手や山ざわからヒナツタ（粘土）を取ってきて水にとかして洗髪すると汚れが落ちて髪がしっとりしたといひます。このヒナツタは昭和十五・六年ごろまで使っていました。」（木原1993年）という。これに類似するような利用方法が縄文時代にもあったかもしれない。

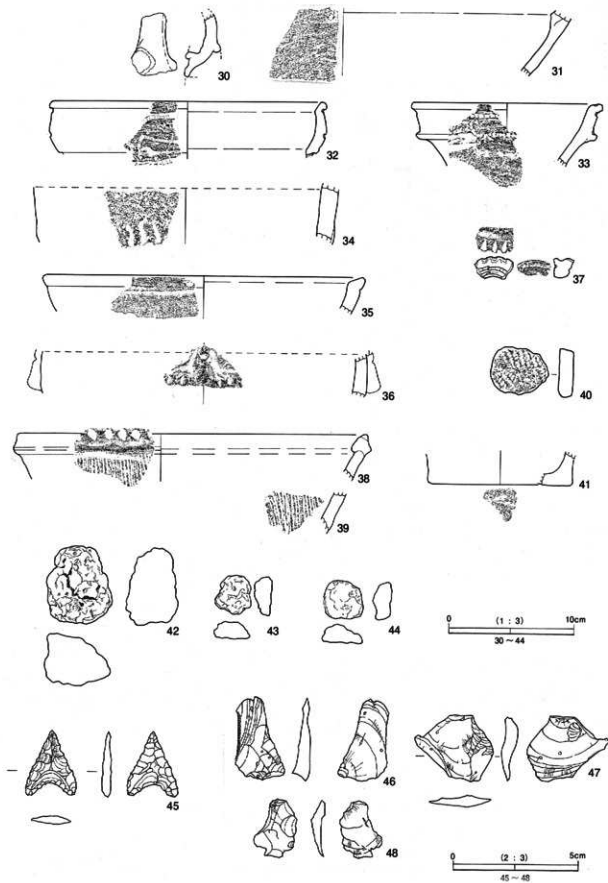
③白色の染料のように使われた事例。

仮に土器製作用の粘土だとした場合、繊維・粗砂・細礫・雲母がほとんど含まれない、という点で、c地点で出土しているどの時期の縄文土器の胎土とも明らかに異なっている。ということは、縄文人はこのような純粋な粘土を手に入れ、これに砂等を混ぜて土器の胎土を作っていたということを裏付ける証拠と言えるかもしれない。

II 各調査の概要



第7図 出土遺物(1)



第8図 出土遺物(2)

調査のまとめ

c地点の成果は、旧石器・縄文時代（前期～中期）を主体とする本遺跡のこれまでの調査結果と一致するものである。旧石器時代の遺物として剥片6点が出土した。縄文時代は、前期（黒浜期か）の土坑2基（重複）を検出し、前期～中期の土器、焼成粘土塊、石鏃などが出土した。

本遺跡における旧石器時代の様相は、c地点の南に隣接する千文七調査区Bでは、Ⅸa層から剥片とナイフ形石器各1点が出土し、f地点に隣接する千文七調査区Aでは、Ⅳ～Ⅴ層及びびろーム上層付近から旧石器時代の遺物集中地点が2箇所検出され、スクレーパーや剥片、焼礫片、礫器などが出土した。少なくとも二枚の文化層が存在することになる。a地点は未整理であるが、旧石器（ナイフ形石器、ポイント）が出土したという。

本遺跡における縄文時代の様相は、c地点の南に隣接する千文七調査区Bでは、縄文土器（前期中葉～中期前葉、黒浜式・浮島式・阿玉台式等）675点、土器片鏃7点（黒浜式転用5点・阿玉台式転用2点）が出土した。縄文土器268点が出土したc地点と合わせ、縄文土器の分布の中心の一つが両地点に亘っていると言える。北に隣接するd地点では縄文土器9点（黒浜式土器2点等を含む）が出土した。a地点は未整理であるが、縄文土器（前期～中期）、土坑・焼土跡の検出が記録されている（堀部1991年）。b地点では、縄文土器（中期阿玉台式）1点、時期不明土坑1基が検出された。これらの調査は、本遺跡の東部の状況を示すものである。

次項のf地点は、本遺跡の西端に位置し、遺構・遺物とも検出されなかった。隣接のe地点も同様であり、周辺のg地点は確認調査面積792㎡で、石鏃・剥片・焼礫各1点のみ、h地点では土坑1基を検出し、遺物は出土しなかった。本遺跡西部は遺構・遺物ともごく散漫であり、縄文土器の出土事例は無い。

以上により、前期黒浜式・浮島式、中期阿玉台式を中心とした、遺構・遺物とも密度の低い遺跡であり、竪穴住居跡は検出されず、集落跡が展開する可能性は低い。遺物の分布は東部に偏るが、土器片鏃・焼成粘土塊の存在が注目される。なんらかの作業・活動の場となっていたのであろう。他方、c地点・g地点の石鏃の出土から、狩猟の場として向山の台地が広く利用されていた可能性もある。

引用文献及び本遺跡に関する調査報告書

- 八千代市教育委員会（1983年）『八千代の遺跡—千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書—』
 堀部昭夫（1991年）『市内発掘調査情報』、八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』
 木原律子（1993年）『衣生活』、八千代市史編さん委員会『八千代市の歴史 資料編 民俗』
 財団法人千葉県文化財センター（1994年）『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他—東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書—』
 小林克・岡田淳子・両角まり・奈良貴史（2001年）『広畑貝塚出土土管の修復と鑑定』（東京都江戸東京博物館研究報告）
 第7号 東京都江戸東京博物館

- 八千代市教育委員会（2002年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』（b地点）
 八千代市教育委員会（2007年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成18年度』（d地点）
 八千代市教育委員会（2009年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度』（e地点）
 八千代市教育委員会（2013年）『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成24年度』（g地点・h地点）

II 各調査の概要

図版1 向山遺跡c地点(1)



(1) 調査前状況(西から)



(2) 調査前状況(東から)



(3) 1T 遺物出土状況-1-



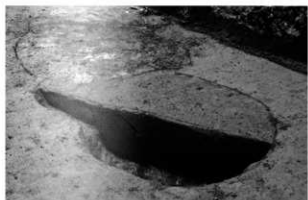
(4) 1T 遺物出土状況-2-



(5) 1T 南壁土層断面



(6) 1T 南壁東端土層断面

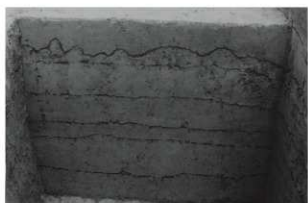


(7) 01P 土層断面



(8) 01P 完掘状況

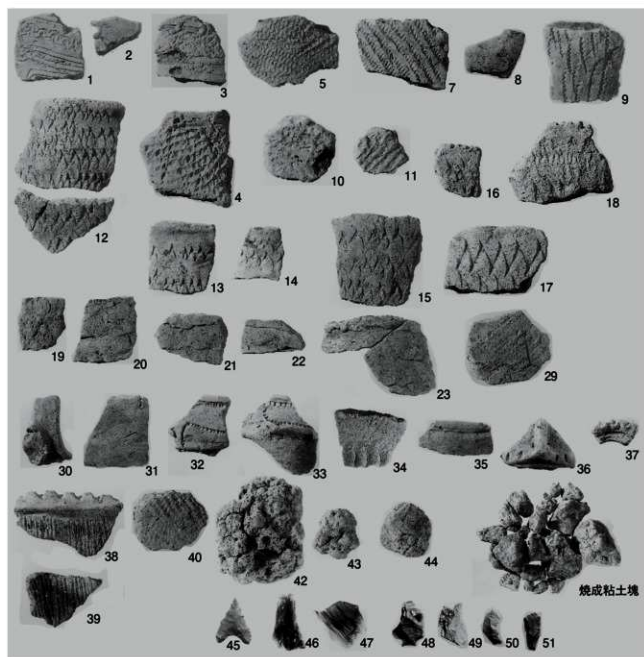
図版2 向山遺跡c地点(2)



(1) 01 PRET 南壁土層断面



(2) 05 PRET 南壁土層断面



(3) 出土遺物 番号は第7図・第8図・第3表と一致

2. 向山遺跡 f 地点

遺跡の立地と概要

本遺跡の立地等については、前項を参照されたい。

f 地点は、本遺跡の西端部標高 23 m 前後の台地上平坦部である。

調査の方法と経過

対象区域の形状に合わせて、2 m 幅のトレンチを 5.5 m、15 m、30 m の長さで設定し、合計 101 m² の上層調査を行った。下層調査は、財団法人千葉県文化財センターの調査区 A の結果を参考として、最も西寄りのトレンチ (3 T) 11 m² を対象とした。これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成 19 年 5 月 10 日から 24 日である。10 日機材搬入、トレンチ設定。11 日・14 日人力による掘削。15 日・16 日・21 日重機による掘削、トレンチ内精査。16 日・21 日下層調査。22 日土層調査、実測記録。23 日重機による、埋め戻し。24 日機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

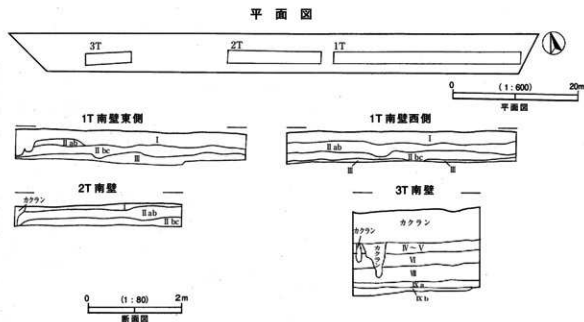
土層の観察所見は、各トレンチの南壁で行った。I 層 (表土) は埋土及び攪乱で、厚さ 0.1 ~ 0.3 m であった。以下、II a b 層 (暗褐色~黒色土、腐植堆積土層~新期富士テフラ層)、II b c 層 (暗褐色~黄褐色土、新期富士テフラ層~ローム漸移層) が検出され、深さ 0.4 ~ 0.6 m で III 層 (ソフトローム) に達した。地表面の標高は、東側の 1 T が高く、2 T の方が低くなる。

下層調査は 3 T で行った。表土は攪乱で、地表下 0.6 ~ 0.7 m に及んでいた。以下、IV ~ V 層 (ハードローム、第 1 黒色帯)、VI 層 (A T 包含層)、VII 層 (第 2 黒色帯上部)、IX a 層 (第 2 黒色帯下部の上半)、IX b 層 (第 2 黒色帯下部の間層) とした。地表下 1.5 m に厚さ 0.1 m の暗色の層があり、c 地点と同様にこの層を IX a 層と判断した。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

本地点では、遺構・遺物とも検出されなかった。遺跡全体の状況については、前項にまとめた。



第9図 向山遺跡 f 地点トレンチ実測図



(1) 調査前状況 (西から)



(2) 調査前状況 (東から)



(3) 調査状況



(4) 1T 完掘状況



(5) 2T 完掘状況



(6) 1T 南壁東側土層断面



(7) 1T 南壁西側土層断面



(8) 3T 南壁土層断面

3. ライノ作遺跡 b 地点

遺跡の立地と概要

ライノ作遺跡は、市域の西部、桑納川から南西に入る花輪谷津の奥部に所在し、谷津を西に臨む台地上、標高 28 m 以下に立地する。

本遺跡は、昭和 58 年（1983 年）の『八千代の遺跡』に遺跡 No. 162 として掲載され、昭和 61 年（1986 年）に西八千代東部土地区画整理事業（東葉高速鉄道八千代緑が丘駅周辺）に先行して発掘調査されている。遺構として縄文時代早期末葉の炉穴 5 基・土坑 1 基、前期中葉黒浜式期の竪穴住居跡 1 軒、後期中葉加曾利 B 式期の竪穴住居跡 1 軒、陥穴 3 基、土坑 7 基等が検出され、遺物は縄文時代早期、前期、後期の土器と、土製珠状耳飾り、石鏃、磨石、磨製石斧等が出土した。東葉高速鉄道建設に伴う財団法人千葉県文化財センターの調査では、旧石器時代の石器（石核、スクレーパー）・剥片、縄文時代の陥穴 1 基、石器（ビエスエスキュー、石鏃）・剥片が検出された。以上により、本遺跡は、旧石器時代、縄文時代（早期・前期・後期）を中心とする遺跡と捉えることができる。

本地点は遺跡の東端に当たる。標高 28 m 前後の台地上平坦面である。

本遺跡の周辺は、花輪谷津を囲むように内野南遺跡・八幡藪遺跡・仲ノ台遺跡・ライノ作南遺跡・大和田新田芝山遺跡が展開している。これらの遺跡は、前述した西八千代東部土地区画整理事業、東葉高速鉄道建設事業及び宅地開発事業等に先行して発掘調査されている。その結果、旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されており、弥生時代、古墳時代の要素はほとんど見られない。

調査の方法と経過

対象区域の形状に合わせて任意に 2 m × 6 m のトレンチを 2 箇所、6 m 間隔で設定し、24 m を上層調査した。西側のトレンチを 1 T、東側を 2 T とした。下層調査は、1 T の西端 2 m × 2 m、2 T の西端 2 m × 1 m、計 6 m を対象とした。これらを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

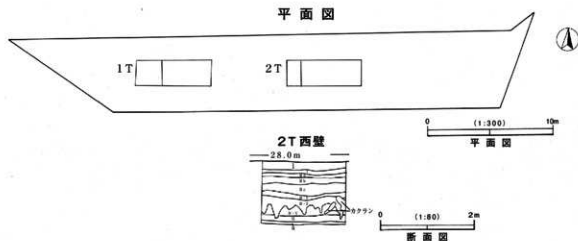
調査期間は、平成 22 年 10 月 5 日から 8 日で、5 日機材搬入、杭設置、トレンチ設定。6 日重機による掘削（終了）、トレンチ内精査、下層調査。7 日土層調査・実測記録、下層調査。8 日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

対象地は墓地であったため、攪乱が激しかった。土層観察所見は、2 T 西壁で行った。1 の表土は、砂・碎石混じりの黒褐色土で、撤去工事に伴う攪乱土と判断した。以下、I 層（旧表土。7.5YR4/2 灰褐色土。）、II a 層（7.5YR2/2 黒褐色土、及び 3/3 暗褐色土。腐植堆積土層。）、II b 層（7.5YR3/3 暗褐色土に 4/3 褐色土が斑状に混じる。新期富士テフラ層。）、II c 層（7.5YR3/3 暗褐色土に 4/3 褐色土が斑状に混じる。上の



第 10 図 ライノ作遺跡 b 地点位置図



第11図 ライノ作遺跡b地点トレンチ実測図

層に似るが、下の層へ漸移する。径5mmの黄色スコリアをまばらに含む。ローム漸移層。Ⅲ-1層(7.5YR4/4褐色土、3/3暗褐色土がにじむ。ソフトローム。)、Ⅲ-2層(7.5YR4/4褐色土。ソフトローム。)、Ⅳ・Ⅴ層(7.5YR4/6褐色土。径1mm黒色スコリア富む。径1~3mm赤色スコリアを含む。ハードローム。)、Ⅵ層(7.5YR5/6明褐色土。火山ガラス・径1mm黒色スコリア富む。径1mm灰色スコリア・橙色スコリア、径2~3mm褐色スコリアを含む。A T包含層。)、Ⅶ層(7.5YR4/6褐色土。径2~3mm黒色スコリア、火山ガラスを含む。)であり、ここでは比較的良好な土層が観察された。地表面の標高は27.84m~27.88m、Ⅲ層上面の標高は、27.2m前後、Ⅵ層は、26.57m~26.74mであった。

遺構・遺物とも検出されなかった。

調査のまとめ

攪乱が激しかった。一部に良好な土層を認めたが、遺構・遺物とも検出されなかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市教育委員会(1983年)「八千代の遺跡—千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書—」

財団法人千葉県文化財センター(1994年)「八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他—東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書—」

八千代市西八千代遺跡群調査会(1996年)「千葉県八千代市仲ノ台遺跡・ライノ作遺跡他発掘調査報告書—西八千代東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査—」(a地点)

II 各調査の概要

図版4 ライノ作遺跡b地点



(1) 調査前状況 (西から)



(2) 調査状況



(3) 1T 上層完掘状況



(4) 1T 下層調査状況



(5) 2T 完掘状況



(6) 2T 西壁土層断面

4. 小板橋遺跡 e 地点

遺跡の立地と概要

小板橋遺跡は、市域の南部、新川西岸の台地上に立地する。新川低地と高津川低地（ケイガラ谷津）及び小支谷によって画された台地上にあり、標高は24 m以下である。

本遺跡は、昭和55年（1980年）の宅地造成に先行する調査で認識され、昭和58年（1983年）の「八千代の遺跡」に遺跡No 245で記載された。これまでに e 地点を含めて6地点の調査が行われている。その結果の概要については、第4表を参照されたい。本遺跡は主に縄文時代、古墳時代中・後期、中世、近世の遺跡と捉えることができる。

e 地点は、遺跡の東端に当たり、標高21～22 mの台地縁辺で、地点の北～東側は崖状になっている。また、地表には不自然な段差があり、地形が改変されていると考えられた。

調査の方法と経過

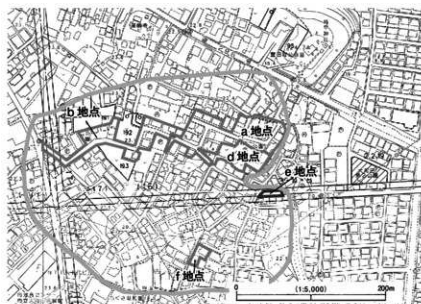
対象区域の形状に合わせ、2 m×5 mのトレンチを3箇所、2 m間隔で設定した。東のトレンチから1 T～3 Tとした。計30 mを人力及び重機で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成24年3月19日から26日で、19日機材搬入、杭設置、トレンチ設定、地形測量。21日廃土置場確保等環境整備、人力で掘削。22日重機による掘削、トレンチ内精査、土層調査・実測記録。26日重機による埋め戻し、機材を撤収して、調査を終了した。

調査の概要

本地点の不自然な段差地形に、d 地点で確認したような中世の地形改変が反映されている可能性も考えられたため、地形測量を実施した。その結果、本地点の最高所は、東端の崖から5～6 mの標高22.572 mの箇所、ここを含んだ面が標高22.235 m以上で、周囲より一段高くなっている（第1面とする）。第1面の西側は20.745～21.632 mの面（第2面とする）、第1面の北側は、21.170～22.119 mの面（第3面）、第2面の北側が20.705～21.172 mの面（第4面）となっていると捉えた。第1面に1 Tを設定し、第1面から第2面への段差、第2面から第4面への段差を含めた箇所に2 Tを設定し、第2面の西部に3 Tを設定した。危険を避けるため、第3面、第4面の掘削は行わなかった。

土層観察所見は、1 Tの北壁で行った。I-1層（表土。7.5YR3/3暗褐色土。）、I-2層（7.5YR3/3暗褐色土

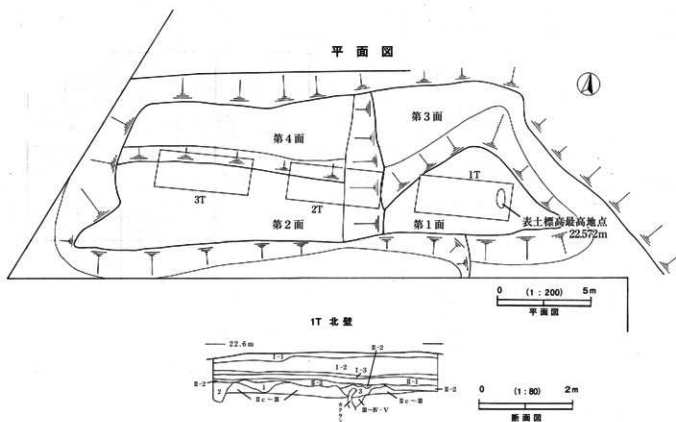


第12図 小板橋遺跡 e 地点位置図

II 各調査の概要

第4表 小板橋遺跡各調査地点の概要

地点名	調査面積 (m ²)	遺構	遺物
a	確認調査 5,379.55	竪穴住居跡 4軒	土師器
	本調査 5,379.55	古墳時代竪穴住居跡 15軒 (中期7軒, 後期6軒, 不明2軒), 土坑1基	土師器, 須恵器, 石製模造品・未製品, 土玉
b	394/3,400	古墳時代竪穴住居跡 4軒, 土坑4基, 溝状遺構4条	古墳時代土師器
	1,536	古墳時代竪穴住居跡 2軒 (中期末~後期初), 土坑4基	古墳時代土師器, 鉄鎌, 土玉, 砥石, 白玉, 白玉未製品, 滑石片等, 近世陶磁器, すり鉢, 泥面子, 寛永通宝
	第2次 9/16	なし	土師器
c	225/1,514.03	古墳時代溝状遺構 3条	縄文土器 (前期), 古墳時代土師器
	本調査 107		
d	170/1,846.8	中世台地整形遺構, 土坑 32基, 溝跡 1条	古墳時代土師器, 中世陶器
	1,177	縄文時代陥穴 6基, 古墳時代竪穴住居跡 1軒, 土坑 3基, 中世台地整形遺構, 中近世土坑 200基, 溝状遺構 2基, 溝跡 11条	縄文土器, 弥生土器, 古墳時代土師器, 支脚, 石製模造品 (双孔円板), 石製紡錘車, 奈良・平安時代土師器, 須恵器, 中近世陶器, 瓦質土器, 管状土錘, 板碑, 砥石, 鉄釘等
e	30/333	なし	古墳時代土師器
f	30/277.38	縄文時代陥穴 1基	近世土器



第13図 小板橋遺跡e地点トレンチ実測図

及び 7/3 にぶい橙色粘土。盛土と考えられる。)、I-3層 (7.5YR3/3 暗褐色土及び 3/2 黒褐色土。径 2～3 mm 黄色スコリアをまばらに含む。旧表土と考えられる。)、II-1層 (7.5YR3/3 暗褐色土。径 1～3 mm 黄色スコリア富む。径 3 mm 焼土粒子まばらに含む。)、II-2層 (7.5YR3/2 黒褐色土・3/3 暗褐色土・4/3・4/4 褐色土が混じり合う。)、II c～III層 (7.5YR4/4 褐色土。ローム漸移層～ソフトローム。)、III～IV・V層 (7.5YR4/4・4/6 褐色土。ソフトローム～ハードローム。)、1層 (7.5YR4/3・4/4 褐色土。)、2層 (7.5YR4/3 褐色土。径 1～2 mm 黄色スコリアまばらに含む。)、3層 (7.5YR4/3・4/4 褐色土。径 5～10 mm 黄色スコリアを含む。))を確認した。1 T には風倒木痕と見られる不整形な穴の痕跡があり、1層～3層はそれに関わる土と判断した。地表面の標高は 22.27 m～22.42 m で、旧表土 I 層上面は 21.9～22.05 m、III 層上面は 21.78 m である。

2 T の地表面は、段差を反映し東側が高く 22.201 m、西側は 21.260 m と 0.941 m の差がある。地表下 30 cm で粘土質の褐色土が検出され、ローム層はほとんど削り取られていると判断された。第 1 面～第 2 面間の段差は、これに起因しているであろう。粘土質褐色土には杭や現代廃棄物が含まれており、現代の攪乱の痕跡と判断した。

3 T では、東側の一部に白色粘土が検出されたが、他はロームブロック混じりの土が地表下 110 cm まで続いていた。この土は埋土と判断された。本地点の北側には新川の低地から西に入る小谷があるらしいことは、現在の地形の起伏から判断され、以前湧水があったという話も聞いている。この小谷の影響で、元来 e 地点は西に向かって低くなるという地形であったのかもしれない。その谷を埋める土がこの埋土と考えられた。

遺物は、1 T から古墳時代と考えられる土師器小細片 6 点が出土した。1 点にはハケ目が認められる。小細片のため図化は省略した。地形改変という人力が加えられていることは確認できたが、その時期が中世以前に遡るといふ根拠は見出せなかった。

調査のまとめ

明確な遺構は無く、遺物は古墳時代と考えられる土師器の小細片 6 点であった。

本遺跡は、標高 20 m 以上の洪積台地上に立地しているにも関わらず、基本層序の II a 層～II c 層が失われている地点が多い。このことは、それらの土が削り取られたためと判断される。その時期については、d 地点のように中世に遡ると考えられる地点もあるが、その他の地点では、近世以降、あるいは近代～現代まで下る可能性もある。e 地点は、d 地点と小谷を挟んで対峙する位置にあり、中世に関わる遺物などの検出にも努めたが、認められなかった。

本遺跡に関する調査報告書

八千代市遺跡調査会 (2008 年) 「千葉県八千代市小板橋遺跡—b 地点埋蔵文化財発掘調査報告書—」(b 地点)

八千代市教育委員会 (2013 年) 「千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成 24 年度」(d 地点確認調査)

八千代市教育委員会 (2013 年) 「千葉県八千代市小板橋遺跡 d 地点—宅地造成地埋蔵文化財発掘調査報告書—」(d 地点本調査)

八千代市教育委員会 (2014 年) 「千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成 25 年度」(f 地点)

II 各調査の概要

図版5 小坂橋遺跡 e 地点



(1) 調査前状況 (西から)



(2) 調査前状況 (東端)



(3) 調査前状況 (東から)



(4) 調査状況



(5) 1T 完掘状況



(6) 1T 北壁土層断面



(7) 2T 完掘状況



(8) 3T 完掘状況

5. 阿蘇中学校東側遺跡c地点

遺跡の立地と概要

阿蘇中学校東側遺跡は、市域の中央やや北東寄りに所在する。佐倉市との市境を流れる小竹川の低地から西に入る森下谷津及び西谷津を北～南東に臨む台地上に立地する。

本遺跡は、昭和46年(1971年)の「千葉県記念物所在地図1970」に追加No.267の遺跡として記載され、昭和53年(1978年)の「八千代市の歴史」にはNo.14として、昭和58年(1983年)の「八千代の遺跡」以降ではNo.119として記載されている。これまでに4地点で調査が行われている。西谷津に臨むa地点では、遺構として縄文時代中期の土坑、弥生時代後期の竪穴住居跡19軒、古墳時代後期～奈良時代と考えられる方形周溝状遺構2基・土坑群が検出され、遺物として縄文土器・打製石斧、弥生土器、須恵器等が検出されている。遺跡中央のb地点では遺構・遺物とも検出されなかった。財団法人千葉県文化財センター(以下、本項においては「千文セ」とする。)の一般国道296号道路改築事業に先行する調査では、遺構として縄文時代の土坑3基、中近世の溝跡2条・土坑23基、遺物として旧石器、縄文土器、弥生土器、奈良・平安時代土師器が検出された。財団法人千葉県教育振興財団(以下、本項においては「千教振」とする。)の県道千葉竜ヶ崎線の改良事業に先行する調査では、遺構として旧石器時代石器集中3箇所、縄文時代の土坑5基、弥生時代の竪穴住居跡1軒・溝跡1条(方形周溝状遺構か)が、遺物として旧石器、縄文土器、弥生土器が検出された。なお、千文セの調査では、西に隣接する赤作遺跡の東部も調査しており、遺構として、旧石器時代遺物集中地点1箇所、縄文時代土坑3基・陥穴1基、中近世の溝跡・道跡6条・土坑墓12基・土坑20基・ピット10基を検出し、遺物は、旧石器、縄文土器、弥生土器、奈良・平安時代土師器・須恵器、中近世の陶磁器・土器・泥面子・数珠玉・砥石・鉄釘・刀子・鉄砲玉・銅鏡・銭貨・人骨が出土した。

本遺跡は、旧石器時代～近世に至る複合遺跡で、遺跡南東部の西谷津に面したところに、主に弥生時代の集落跡があり、遺跡西部の赤作遺跡との隣接地域には、主に中近世の土坑墓群が展開すると考えられる。

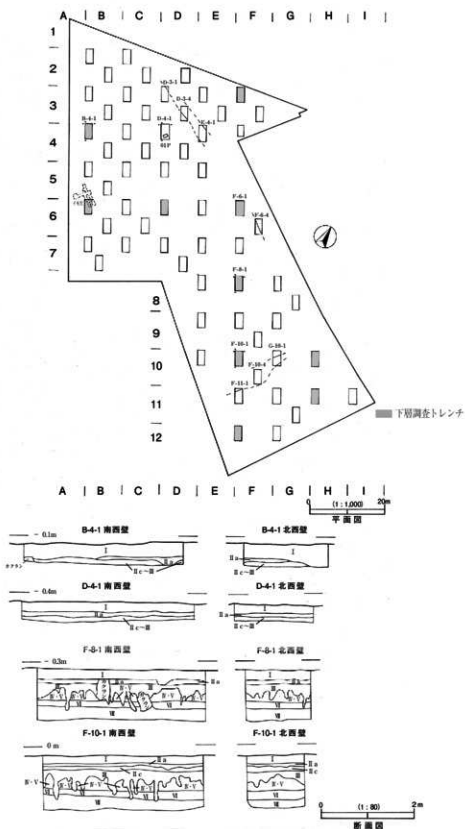
c地点は、遺跡西部に当たり、標高24mの台地上平坦面の細地である。

調査の方法と経過

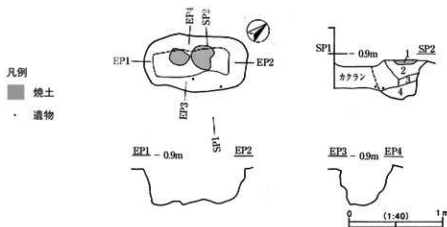
対象区域を10m方眼に区画し、アルファベットと数字の組合せでグリッド名とし、さらにその中を5m四方に4区画し、1～4と小グリッド名を付けた。2m×4mを原則としてトレンチを63箇所、合計502m²分設定し、上層調査を行った。下層調査は、概ね20m四方に1箇所の割合でトレンチを選定して行った。



第14図 阿蘇中学校東側遺跡c地点位置図



第15図 阿蘇中学校東側遺跡c地点トレンチ実測図



第16図 O1P実測図

人力及び重機でこれらを掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査期間は、平成23年10月12日から28日で、12日機材搬入、環境整備、杭設置、トレンチ設定。13日・14日トレンチ設定、13日～18日人力による掘削。17日～19日重機による掘削、トレンチ内精査。19日～26日土層調査・実測記録、下層調査。21日・24日遺構（O1P）調査。27日・28日重機による埋め戻し、機材を撤収し、調査を終了した。

調査の概要

土層の観察所見としては、Ⅰ層（表土）、Ⅱa層（黒色土、腐植堆積土層）、Ⅱc層（褐色土、ローム漸移層）、Ⅲ層（褐色土、ソフトローム）、Ⅳ・Ⅴ層（褐色土、ハードローム）、Ⅵ層（明褐色土、AT含有層）、Ⅶ層（褐色土、第2黒色帯上部）を確認した。

遺構としては、D-4-1で土坑1基（O1P）が検出された。隅丸長方形で、上面は1.09m×0.6m、底面は長方形で0.8m×0.29m、深さは0.34～0.40mで底面に凹凸がある。長軸方位角は、N-41°-Eである。覆土は、1（赤褐色焼土。明確な焼土）、2（暗褐色土。ローム・黒色土を少量含む）、3（黒褐色土。黒色土に少量のローム・暗褐色土が混じる）、4（暗褐色土。ロームを少量、黒色土を微量含む）で、1の焼土がややまっていた以外は、しまり・粘性とも弱い土であった。出土遺物は3点で、瓦質土器、瓦、細碟であった。瓦はごく新しいもので、瓦質土器とともに攪乱からの出土である。近世以降の土坑と判断した。

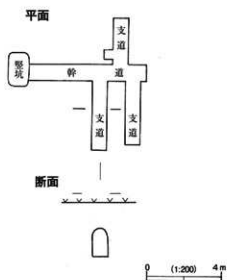
他に、D-3-1～D-3-4～E-4-1～F-6-4を通る溝跡と、F-11-1～F-10-4～G-10-1を通る溝跡を検出した。近代以降の溝跡と判断した。

また、A-5-4～B-5-2～B-6-1に亘って、いわゆるイモ穴と呼ばれる地下式の横穴を検出した。竪坑が深さ290cm掘られ、その半分以下の壁を横穴として掘り進め、これを幹道とし、そこから枝分かれする穴として一方に2本、他方に1本が掘られていた。竪坑は埋まっていたが、横穴は空洞に残っており、埋土には、清涼飲料水の空き缶が含まれていた。このためごく新しいものと判断した。イモ穴については、『八千代市史資料編 民俗』に絵入りで記録がある。サツマイモの貯蔵方法として、イモ穴に入れて田植の頃まで保存する方法があった。イモ穴は一丈位の深穴のことで、入口が狭く奥は長靴のように広がっていて、一方方向だけでなく二方にも三方にも掘ってあり、大人が立って歩ける程の高さがあり、はしごを使って出入りした。たいいの農家では庭に大きなイモ穴を掘り毎年使っていた、という（小川1993年）。また、今回検出のものに似たイモ穴が、現在60歳の村上在住の市民が子どもの頃（昭和30年代か）、家の庭先にあったそうである。深さ5～6mあり、梯子で上り下りした。サツマイモ・サトイモ・ショウガ等の保存に使っていたという。この他、イモ穴には、稲藁を敷き初殻を充填してイモと土が接しないようにし、空気穴としてパイ

II 各調査の概要



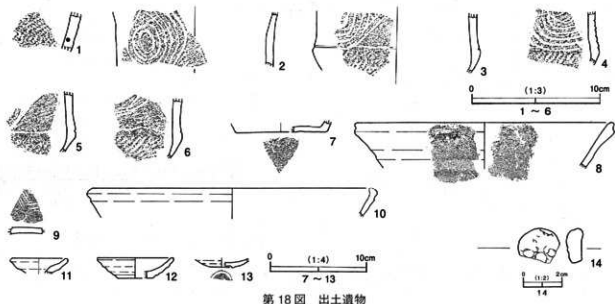
小川 (1993 年) から転載



第 17 図 イモ穴参考図

第 5 表 阿蘇中学校東側遺跡 c 地点遺構・各トレンチ出土遺物数

	縄文土器	土器類	須恵器	かわらけ	垂焼土器	瓦質土器	陶器	陶磁器	焼成粘土塊	瓦	瓦葺子	漆製品	骨片	銅器	小礫	礫片	不明	計
01 P						1				1				1				3
B-4-1	5	3						4	1									13
B-6-1							1											1
C-3-4								1										1
C-4-1			1															1
C-4-4									1									1
C-6-4																1		1
D-4-1		2					1				1	1						5
D-6-1		2			1		7			2		2			1			15
D-7-1		2																2
E-3-4				1			1											2
E-5-1		1																1
E-7-1							1											1
F-3-1		2																3
F-4-1							1											1
F-6-1		1					1			1		1			1	1		6
F-6-4		1		1			1	1										4
F-8-1		2						2										4
F-9-1					1													1
F-10-1							2	1		1					1	1	1	7
F-12-1					1			1		1					1	1		5
G-9-1	1																	1
I-11-1								3					1					4
計	6	16	1	2	3	1	16	13	2	6	1	4	1	1	5	4	1	83



第18図 出土遺物

第6表 阿蘇中学校東側遺跡c地点遺物観察表

No.	出土地点	器形	状態・部位	計測値(mm)	○胎土・石群 ●色調	形状・調整・文部などの特徴	その他
1	G-91	漆鉢	胴部	小片	○繊維、線跡少 ●内) 黒褐色、外) 黒褐色、赤褐色	内) 横方向ナブ、ヒメナ。 外) 横文直しか、ループ文か。	縄文土器 前期後半
2	B-41	漆鉢	胴部	底心上縁付 128 残存高 42	○繊維、線跡、赤褐色粒了少 ●内) 灰褐色、淡褐色 外) 淡赤褐色、褐色、黒色	内) ナブ。 外) 同心状波紋、横文縦文直しか。	縄文土器 中期前半
3	B-41	漆鉢	胴下部	底心上縁 130 残存高 45	○繊維、線跡 ●内) 灰褐色、淡褐色、黒色、灰褐色 外) 褐色、黒褐色、赤褐色	内) ナブ。 外) 波紋、横文縦文直しか。	縄文土器 中期前半 五葉形口式か まーもは同一類 株と考えられる。
4	B-41	漆鉢	胴下部	残存高 41			
5	B-41	漆鉢	胴下部	残存高 47			
6	B-41	漆鉢	胴下部	残存高 46			
7	D4-1	釜	底面	底面上縁 196	○繊維、線跡少 ●内) 淡褐色、淡褐色 外) 褐色、淡褐色、淡褐色	内) ナブ(平直)。 外) ハウ型、底付) ハウ型。	土器片か
8	F-101	すり鉢か	口縁部	底心上縁 200 残存高 48	○繊維 ●赤褐色、黒口) 淡褐色	口) 口縁部、器身中にひびがある。また一部に ムカあり、二次焼成を受けているのではない。	陶器
9	C-41	すり鉢	底面	小片、扁平	○繊維 ●赤) 灰褐色と灰色の胎 外) 黒褐色	内) ろくろ目が平直になっている。 底面) ナブ。	瓦質土器か
10	F-41	小皿か	口縁部	底心上縁 302 残存高 30	○繊維 ●赤褐色、黒口) 白色	口) 口縁部、両面に施釉。	陶器
11	B-91	小皿か	口縁-体部 1/4部	底心上縁 480 残存高 16	○繊維 ●灰白色	口) 口縁部、両面に施釉。	陶器
12	D4-1	小皿	口縁-体部 約1/6	底心上縁 222 残存高 22	○繊維 ●白色、褐色味あり。	口) 口縁部、両面に施釉。	陶器
13	B-51	小皿か	底面	底面上縁 220	○繊維 ●内) 白灰色、外) 白色、淡褐色	口) 口縁部、内) ナブ、施釉。 外) ナブ跡あり。	陶器
14	D-41	泥団子	2/3	21 × 残厚 19、厚 5.8	○繊維 ●赤褐色、淡褐色	器身は、土玉の縮みか。	

ブ等を差し込むようなタイプもあり、その場合は、今回検出したような大規模なものではなく形態も単純なもので、現存もイモ類の保存のために掘られるようである。

遺物は、総数 83 点出土した。種類と出土地点は、第 5 表にまとめた。土師器と陶器が各 16 点で主体を成す。陶磁器としたものと瓦は、ごく新しいものと見られる。鉄製品は、錆化して崩れている。

14 点を抽出し図示した。

調査のまとめ

遺構としては、近世以降と考えられる土坑 1 基であった。

遺物は縄文土器、土師器、陶器などであるが、小細片が多く、散漫な出土状況であった。

遺構・遺物ともに密度の低い地点であることを確認した。ほかに近代以降の溝跡や昭和時代と考えられるイモ穴を検出した。

II 各調査の概要

図版6 阿蘇中学校東側遺跡c地点(1)



(1) 調査前状況



(2) 調査状況(西から)



(3) 調査状況(北から)



(4) B-4-1 南西壁土層断面



(5) D-4-1 南西壁土層断面



(6) B-4-1 遺物出土状況



(7) D-4-1 OIP 検出状況



(8) OIP 土層断面

図版7 阿蘇中学校東側遺跡c地点(2)



(1) OIP 完掘状況



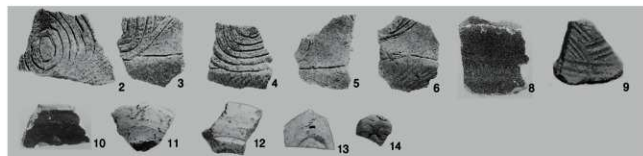
(2) G-10-1 溝跡検出状況



(3) F-8-1 南西壁土層断面



(4) イモ穴内部の状況



(5) 出土遺物 (番号は第18図と一致)

引用文献及び本遺跡に関する調査報告書

- 千葉県教育委員会 (1971年) 『千葉県記念物所在地図 1970』 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図
- 八千代市史編さん委員会 (1978年) 『八千代市の歴史』
- 八千代市遺跡調査会 (1980年) 『阿蘇中学校東側遺跡』 (a地点第1次)
- 八千代市教育委員会 (1983年) 『八千代の遺跡—千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在地調査報告書—』
- 八千代市遺跡調査会 (1984年) 『千葉県八千代市阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』 (a地点第3次)
- 小川泰巳 (1993年) 『食生活』 八千代市史編さん委員会 『八千代市の歴史 資料編 民俗』
- 財団法人千葉県文化財センター (1999年) 『一般国道296号道路改築事業埋蔵文化財調査報告書1—八千代市赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡—』
- 財団法人千葉県教育振興財団 (2007年) 『八千代市向地遺跡・雷遺跡・阿蘇中学校東側遺跡—県道道路改良委託(幹線道路網整備)(主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査)—』
- 八千代市教育委員会 (2010年) 『千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成21年度』 (b地点)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばげんやちよし こうきょうじぎょうかんれんいせきはつくつちょうさほうこくしょ Ⅷ へいせい26ねんど
書名	千葉県八千代市公共事業関連道路発掘調査報告書 平成26年度
副書名	向山道跡c地点 向山道跡f地点 ライノ作道跡b地点 小板橋道跡e地点 阿蘇中学校東側道跡c地点
編者者名	常松成人
編集機関	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138番地2 TEL 047(483)1151 代表
発行年月日	平成27年1月30日

ふりがな 所収道跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	道跡番号					
ひこうやまいせきしーちてん 向山道跡c地点	おおわだしんでんあざむこうやま 大和田新田字向山507-80ほか	1221	173	35度 43分 45秒	140度 5分 52秒	平成13年11月13日 ～ 平成13年12月4日	上層 81. 下層 20 / 630	歩道建設
ひこうやまいせきえふちてん 向山道跡f地点	おおわだしんでんあざむこうやま 大和田新田字向山500-10ほか	1221	173	35度 43分 47秒	140度 5分 41秒	平成19年5月10日 ～ 平成19年5月24日	上層 101. 下層 11 / 486	歩道建設
おいのきくいせき ライノ作道跡 グーちてん b地点	みどりがわがごちょうの 緑が丘五丁目901番18・19	1221	162	35度 43分 47秒	140度 4分 56秒	平成22年10月5日 ～ 平成22年10月8日	上層 24. 下層 6 / 221.1	歩道建設
こいたばしいせき 小板橋道跡 いーちてん e地点	おおわだあざみりやしき 大和田字古屋敷359番21・22	1221	245	35度 42分 58秒	140度 6分 34秒	平成24年3月19日 ～ 平成24年3月26日	上層 30 / 333	道路用地 管理
あそちゅうがっこうのりがわ 阿蘇中学校東側 いせきしーちてん 道跡c地点	よなもとあざさんや 米木字山谷2713-5、2714-1、2715-3	1221	119	35度 44分 48秒	140度 7分 26秒	平成23年10月12日 ～ 平成23年10月28日	上層 502. 下層 80 / 4,981.25	消防署 建設

所収道跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向山道跡c地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	縄文時代土坑2基	剥片 縄文土器（前期、中期）、 焼成粘土塊、石鏃	
向山道跡f地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	なし	なし	
ライノ作道跡b地点	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	なし	なし	
小板橋道跡e地点	包蔵地	古墳時代	なし	古墳時代土師器	
阿蘇中学校東側道跡c地点	包蔵地	縄文時代 中近世	中近世土坑1基	縄文土器 中近世陶磁器	
要 約		<p>向山道跡c地点 旧石器時代の遺物として剥片が出土した。縄文時代は、前期（黒浜期か）の土坑2基（重複）を 検出し、前期～中期の土器、焼成粘土塊、石鏃等が出土した。</p> <p>向山道跡f地点 遺構・遺物とも検出されなかった。</p> <p>ライノ作道跡b地点 攪乱が激しかったが、一部に良好な土層を確認した。遺構・遺物とも検出されなかった。</p> <p>小板橋道跡e地点 明確な遺構は検出されなかった。遺物は、古墳時代と考えられる土師器小細片であった。</p> <p>阿蘇中学校東側道跡c地点 遺構は、中近世の土坑1基であった。遺物は、縄文土器、土師器、陶器等であるが、小 細片が多く、散漫な出土状況であった。他に、近代以降の溝溝や昭和時代のイモ穴を検出した。</p>			

千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ
平成 26 年度

発行日	平成 27 年 1 月 30 日
編集・発行	八千代市教育委員会 教育総務課 〒 276-0045 八千代市大和田 138-2 TEL 047 (483) 1151 代表
印刷	松樹印刷有限公司
